

# 恵迪寮寮歌の歌詞に表現される 札幌農学校精神



# 「都ぞ弥生」に歌われた農学校精神

北海道の大自然を流麗に歌い上げた「都ぞ弥生」だが、最後の5番の歌詞に「貴き野心の訓へ培い」と札幌農学校精神を歌い込んでいる。「貴き野心」クラークが開校式辞に述べたa Lofty Ambitionの直訳である。宇野親美（「北大物語」）「（都ぞ弥生は）雄大な自然の懐にすっぽりと抱かれて、その昔のクラークの遺訓を培うと言うのだ。人物、人間というものが影を見せない。いわんや社会もない。まことに持って静寂なものである。これに比べて一高の寮歌「ああ玉杯に」は人間臭フンである。（中略）立身出世の情熱がうなっている。」（\*「立身出世の情熱」は「尊き野心」が否定したものであった。（後出））

作詩者・横山芳介は北の自然に酔いしれ、自然に自己を埋没させるだけではなく、札幌の地に流れる、清き精神を見出していた。横山は札幌遠友夜学校の熱心な学生先生だったのである。

卒後、彼は静岡県の小作官となるが、いつも弱者の側に立ち、貧農の人々から、神様とまで言われた。46歳という若さで閉じた彼の人生は「都ぞ弥生」の歌詞のように清く美しい生涯であった。

## 都ぞ弥生

（明治四十五年寮歌）

横山芳介君 作歌

一 都ぞ弥生の雲紫に

花の香漂ふ宴遊の筵

尽きせぬ奢に濃き紅や

その春暮れては移らふ色の

夢こそ一時青き繁みに

燃えなん我胸想ひを載せて

星影訝かに光れる北を

人の世の 清き国ぞとあこがれぬ

二

豊かに稔れる石狩の野に 雁遙々沈みてゆけば

羊群声なく牧舎に帰り 手稲の嶺黄昏こめぬ

雄々しく聳ゆる楡の梢 打振る野分に破壊の葉音の

さやめく藪に久遠の光り

おごそかに 北極星を仰ぐ哉

三

寒月懸れる針葉樹林

櫛の音凍りて物皆寒く

野もせに乱るる清白の雪

沈黙の暁霏々として舞ふ

ああその朔風颯々として 荒ぶる吹雪の逆巻くを見よ

ああその蒼空梢聯ねて

樹氷咲く 壮麗の地をここに見よ

四

牧場の若草陽炎燃えて 森には桂の新緑萌し

雲ゆく雲雀に延齡草の 真白の花影さゆらぎて立つ

今こそ溢れぬ清和の陽光 小河の溇をさまよひゆけば

うつくしからずや咲く水芭蕉

春の日の この北の国幸多し

五

朝雲流れて金色に照り 平原果てなき東の際

連なる山脈玲瓏として 今しも輝く紫紺の雪に

自然の藝術を懐みつつ 高鳴る血潮のほとばしりもて

貴とき野心の訓へ培ひ

栄え行く 我等が寮を誇らずや

# 「貴き野心の訓え」

## A Lofty Ambition + Boys, Be Ambitious

- 1876年8月14日 クラーク博士の札幌農学校開校式辞の一節
- 「長年にわたり、東洋の国々を暗雲のごとく包んでおりました、排他的階級制度と、因習との暴政から、貴国がかくも見事に開放（=自由を獲得）されたことは、教育を受けんとする学生一人ひとりの胸のうちに 高邁なる志（a lofty ambition）を目覚めさせずにはおきません。
- 若き紳士諸君(young gentlemen)、諸君の忠実にして有効なる奉仕をおおいに必要としている諸君の祖国において、勤労と信頼により得られる最高の地位と、それに伴う名誉とに値する人物になるよう諸君一人一人が自ら精進する（strive to prepare yourself for : 二適サンコトヲ勉メヨ）ことを望むものであります。
- 諸君は健康を保ち、欲望と熱情を抑制し、従順と勤勉の習慣を身につけ、これから学ぶ諸科学に関するあらゆる知識と技術とを獲得するように努めなさい。そうすることで初めて諸君は重要な地位に値すると言えるのです。」
- 1877年4月16日 クラーク博士帰国に際し、島松の駅通で見送りに来た生徒たちに向かって発した最後の言葉：Boys, Be Ambitious, like this old man

# 札幌農学校精神

- **アメリカ独立宣言の精神**：南北戦争に出征したクラーク博士が札幌にもたらした思想。
  - 自由・平等
  - 自主・独立
  - 博愛（リンカーン：何人にも悪意を抱かず、全ての人に慈愛を持って）
  - 民主主義
- **弱者の側に立つ**（クラーク奴隷解放のために南北戦争にボランティア軍を率いて出征）
- **Be Gentlemen**：紳士たれ。自主・独立の精神を持った自律的な個の確立。自重自治、自分の責任は自分で取る。紳士としての節操を持つ。
- **Lofty Ambition**（高邁なる志），**Boys, Be Ambitious!**：大志を抱け
- **真理、正義、世のため人のため（奉仕、利他主義）**：内村鑑三は1926年、「正義に燃え、真理を熱愛し、社会人類のために犠牲たらんとする」人物を排出しなくなってしまったと嘆く。言い換えれば、初期札幌農学校はそのような精神の持ち主を輩出した。